放火ファイヤーゲーム

平　龍生

目次

第一章　三人の脅迫者
第二章　翳った夏
第三章　青春の蹉跌
第四章　二人目の放火魔
第五章　真夜中のデート
第六章　赤い幻視図
第七章　残り火がひとつ

第一章　三人の脅迫者

何か嫌な予感がする夜であった。
蒸し暑い日が続き、不快指数も上っていた。
戸室左知子（ともろさちこ）は、この夜も、人の寝静まった街に一人さまよい出た。木造家屋の低い天井の一室に閉じ込められていると、じとっとした汗の粒が、皮膚の穴から噴き出した。
こんな時、左知子はべとついた空気の帷（とばり）を、一気に引き裂いてやりたいと思う。
蒸し暑さに対しているだけでは、鬱屈した思いは晴れはしなかった。
〈真夜中の二時〉左知子は勝手口の木戸をそっと開け、暗い街中に、一歩を踏み出した。
これで何度目のことになるのか。
一台の自転章が入り組んだ路地路地を縫って、すっすっと風を切った。
先程までの蒸し暑さが払われ、いっとき左知子は爽やかな風を真似ることが出来た。
自転車のチェーンには昼間のうちに注油しておいたので不快な軋りの音はしなかった。
いまは風を切る乗物と一体になっている。
川越の街はどこまで走っても山の影に行き当らない。関東平野の北部の地であったが、秩父山地とは少し距てられていた。
西からせり出している武蔵野台地と、川をはさんで位置する東北辺の入間川台地によってこの街

は形造られている。
何の趣きもない平坦な地で、家々の軒並みも逼塞（ひっそく）した態の身の寄せ方であった。
この古い街並みが左知子はあまり好きではない。生れ育った街であったが、自分の体臭を嗅ぐようで、とてものこと好きにはなれなかった。
すでにこの夜の目標物は左知子の頭の中にあった。迷わず自転車は、路地の角々を擦り抜け、火の遊びに憑かれた一人の女を目的地にと導いた。
左知子の家は三光町の外れにあった。
川越の旧市街地と言われる地域で、新興の繁華街とは少し離れている。隣接の田町に入り、東上線の線路道脇の小路に入り込んだ。
県立女子高の運動場の金網が、線路に添うようにして張り巡らされている。人が一人通れる程の道幅である。自転車を運動場の低いコンクリート壁に立てかけ、そこからは歩く。百メートル足らずの場所に一軒のバラック小屋があった。
ここには老人夫婦が住んでいる。左知子は顔見知りであった。生活保護を受ける手続のために市庁舎に行った時、福祉課の窓口で老人夫婦に出会った。前々から見知ってもいた。
いつもは薄汚れた菜っ葉服を着ているのに、この日ばかりは白いＹシャツを着用していた。
連れの老婦人もそうだった。
こざっぱりした服装で、二人とも、この時威儀を正して順番を待っていた。変な敵意が湧いた。
二十三歳の左知子には二人が疎ましい存在に見えた。係員の前で、ぺこぺこと頭を下げるばかりの態度も許せなかった。
バラック小屋の前に立ってみて、あらためてこの老人夫婦の律義な暮らしぶりに腹が立った。
どこから拾って来るのか、焚付（たきつけ）け

に使う木片や板切れが狭い庭先には積んであった。ガスも水道もない小屋だから煮炊きは昔ながらの薪が使われていた。

几帳面（きちょうめん）に組まれた何組かの薪の山を見ているうちに、無性に腹が立って来たのである。一本一本、古い木切れを拾い集め、ノコギリで切り揃え、斧（おの）を振り降ろすー。

何にしがみついて生きているのか。

余りにも貧しいのだった。

老人夫婦のこれまでの暮らし向きのことに同情もしたがそれ以上の気持は持てなかった。いや、弱い者に対する憤りの情を同時に持った。

“まるで虫けらじゃないの”

と、左知子は口の中で呟いた。

独り勝手なもの言いではあった。

バラック小屋の一部は中途半端な三角地帯になっていた。いかにもそこは人生の吹き溜りと言った狭雑な感じの場所であった。

左知子は細い枝木を掻き集め、井型に組まれた小さな薪の山の底に投げ入れた。

ポケットからマッチを取り出す。

小屋の板壁にいちばん近い薪の山に狙いを付けていた。火は板壁にも燃え移るはずであった。

マッチを擦る。風はなく、空気は微動だにしなかった。火が勃（おこ）った。

ぱちぱちと小さな音が弾け、風はないはずなのに一筋の煙が揺れて上（のぼ）った。

小さな、ミニチュアの五重の塔に火が点ぜられたようなものだった。このきっちりと仕上げられた造型が崩されて行くことには生理的な快感があった。今は小さな火だったが小屋の板壁に火がのり移れば、人を殺すことだって出来るのだった。

いつまでも自分の顔を火で烙（あぶ）っていた

いと思った。汗の匂いが払われていた。
左知子はやっと一日の充実の時間を持った。
火を付けたのはこれで三度目のことであった。
初めはゴミ箱に火を付けた。三光町の町内のことであったので、この不審火のニュースはすぐに左知子の耳にも入った。木箱は半分も燃えずに消し止められていた。
火種が考えられないところから放火の疑いが持たれた。二度目は三光町と隣接した六軒町の木材置場に火を放った。
火の対象物を求めて歩いている時に、たまたま蒸せたような木の香を嗅がされた。むしろ悪臭であった。白い木肌を夜目にさらしているのに、木の香は腐臭に充ち充ちていたのであった。
それに、いかにも火を付けてくれと言わんばかりに、道の際に立てかけられている杉板に左知子はつい誘われた。木材置場は敷地内がコンクリート打ちされており、かってはトロッコでも引いたのか二本の鉄路が残されていた。
青白い外灯の蛍光色が夜間でも、構内を照らし出している場所だった。
二度目のことで左知子はかなり大胆になっていた。木材置場の高い屋根部分の上は従業員宿舎になっている。窓枠が十余りも並んでいて、そのうちのいくつかは窓が開け放たれたままになっていた。誰れかに見られているかも知れないという思いはあったが、左知子は躊らうことはなかった。
やはりこの夜も蒸し暑かった。
西の地方では雨が降っているのに、どこで前線が停滞しているのか、厚い雲ばかりが空を覆っていたのであった。早く、この木材の放つ腐臭からのがれたかった。左知子は一台の小型クレーン車を見つけた。杉材の間をくぐり抜け、そのクレー

ン車に近付いた。赤いポリエチレンの容器に入ったガソリンが目当てだった。
あいにく、中のガソリンの量は少なかった。
十分の一程しか入っていない。
行儀よく並べられた角材の根元にその引火物を撒き散らす。少し離れた位置から火の付いたマッチをひょいと投げた。たちまち引火し、コンクリート床を這った火は木材に乗り移った。
火の爆ぜる音を聞き取る前に、立てかけられた木材の背を火は駆け上ろうとしていた。
急に、あたりが明るくなり、左知子は反射的にその場から身を翻していた。
トロッコの鉄路も輝やいて見えた。
表の道路に飛び出した時、背後で人の叫び声を聞いた。
「おい！火事だあ！」
背後で起きていることを知る術はなかったが、真夜中の静けさが破られ、そのあたりだけが騒々しくなっていた。路地の端に止めてあった自転車に飛び乗る前に後を振り向いたら、夜空に明りが一点灯されていた。
この時の火は回りが早く、木材の三分の一程が火に包まれた。翌々日の朝刊の一隅には半焼と記された。何か、自分の戦果の跡をたしかめるようで、この時は胸がどきどきした。小さな活字が左知子の知らないことも教えてくれた。
川越ではいちばん古い材木問屋であった。
三度目の放火の結果も知りたかった。
今頃、あの老人夫婦は火の中でのた打っているのかと、恐ろしい情景のことを思い浮かべた。
明日は放火現場にもう一度行ってみようと思った。あんなボロ小屋など跡形もなくなればいいと本気で考えていた。

三光町の路地に入る。また嫌なことを思い起す。自宅近くのさわら垣の家がもう見えていた。
自転車のスピードを早める。
まだ三十メートルは先なのにもう飼犬が吠え声を上げた。耳を閉じたくなった。
さっと、さわら垣の家の前通り過ぎた。
まったく、うるさい犬だった。
いつもの呪いの文句を佐知子は口にした。
“そのうち、火を点(つ)けて殺してやるから”

2

自転車を勝手口に通じる狭い露地に置く。隣家とは低い板塀で仕切られていた。
左知子はこの夜、一枚の脅迫状を手にした。
勝手口の板戸に手を掛けようとした時、ひらりと一枚の紙片が落ちた。外灯の明りはここまでは届かなかったが、夜空には街明りが映じていて、眼を凝らせば文字ぐらいは読めた。
手にした紙片には新聞の活字が張り付けてあった。四角く切り抜かれている。
明らかに作意的な一文であった。
『いいかげんにしろ』短い字句だったが、充分に脅迫的な意味を伝えていた。
読み了えてから急に自分の立場に気付いた。
たった今、バラック小屋に火を点じたばかりであった。勝手口の前に立ちつくしていることの危険さに思いが行った。
それでも、努めて平静さを装った。
そっと、音のしないように板戸を開ける。
やっと、擦り抜けられるだけの隙間を作り、体をすべり込ませた。締める時、一センチほどの覗き穴を用意する。

やはり、隣家の便所の窓が気になった。
五、六秒、靴脱ぎ場に立ちつくしたまま、時を稼ぎ、板戸の隙間から、二メートル先の闇の一郭に視線を返した。
板格子の縦の木枠が並んでおり、窓ガラスは半開きの状態になっていた。
気のせいか、ちらと人影が揺れたように見えた。息を詰め、なおも、見返す。
やはり、気のせいかも知れなかった。
古びた板壁と、格子の窓、その奥は暗い闇の空間になっていた。
台所の板の間を用心してすすむ。奥の六畳間には、父の梯吉（ていきち）が寝ている。
いつも、夜の十二時過ぎまで、テレビを見てから梯吉は眠る。六畳間の手前、三畳の部屋が佐知子の寝室であった。
“脅迫状を投げ入れたのは誰なのか？”
頭の中では、懸命にそのことを考えていた。
誰かが、佐知子に挑戦状を差し向けていた。
足音を忍ばせ、自分の部屋に入った。
三畳間と父の寝ている六畳間は襖（ふすま）で仕切られているだけだった。
ちゃんと閉めておいたはずなのに、襖は半分ほども開いていた。
佐知子はそのことに気付いていなかった。
青白いテレビの蛍光色が隣の六畳間の様子を照らし出していた。梯吉は半身不随の身であった。
本職は大工なのに、二年前に植木職人の真似をして木から落ち、それ以来仕事が出来なくなった。まだ、五十六歳なのに、歩行困難になり、寝ているしか能のない人間になってしまった。
枕元にやかんが転がっていた。咽喉が乾いた時のために用意しておいたものである。

梯吉は水を飲もうとして、やかんを引っくり返してしまったのかも知れない。
テレビの画面はなにやら神経質そうな光を放っていた。走査線が伸びたり、縮んだりし、時折り、がーと不協和音がして、画像が乱れた。
佐知子はスイッチを押すことを考えたが、梯吉が起きてはまずいと思いそのままにしておいた。
急に、蒸し暑さが全身を包んだ。
懸命に自転車を漕いだのだ。べとべとした汗が肌から噴き出していた。ごわごわしたジーパンも、汗を吸ったのか太腿に張りついている。一気に脱ぎたくなり、黒いTシャツを剥ぎとりにかかった。
べったり、腋の下や、みぞおちの下あたりに汗がたまっていて、着衣を脱ぐのに一苦労をした。
“ああ、そうだ。脅迫状を突き付けてきたのはあの連中なんだわ”半身をふとんから出し、細い、枯れたような脚を畳の上に投げ出している父のだらしのない寝姿を見た時、佐知子はそう呟いた。
働き手を失ったために、母の芳枝がスナックの店を開いた。初めは、順調だったが、いつの間にか、客足が絶え、借金ばかりがかさむようになった。
同じ出資者の一人であった梯吉の友人の男と芳枝はいい仲になった。梯吉が仕事の関係で世話になった不動産会社の社長であった。芳枝は店を始めた時が四十一歳、女盛りなのに、梯吉は半身不随の身で、性的不能者になっていた。水商売の場で知り合った男と女の仲、なるようになったのであった。
芳枝の放縦さはそれだけのことではなかった。
店の妻帯者の男と出来合いになり、結局、川越の街から出奔（しゅっぽん）してしまった。
多額の借金と浮名だけが残された。
わずか、十五坪しかない家なのに、借金の抵当になっていたので、このところ立退き要求のために、再々

人相のよくない連中がこの家には出入りしていた。
一か月以内に家を明け渡すよう要求されていたのであった。『いいかげんにしろ』債権者や、借金取り立て業のサラ金業者ならやりそうなことであった。「住んでいるものには居住権というものがあるんですから」やっと、佐知子が反論した。
脅しを掛けてくる連中に対し、佐知子は怯むことはなかったが、その分、この連中に恨みを買っていることは確かだった。
そんな、家の事情で休学していたが、左知子は本当なら今年の春、大学の教育学部を卒業していたはずだった。その夢も叶わず、今日まで来た。
梯吉はいつも黙っていた。左知子ともほとんどしゃべらない。ぶつぶつ言っている時は、大抵テレビ相手であった。左知子はやっとTシャツをとった。
すっぽりと頭から抜いた。下には何もつけていない。嫌なものを見る思いで自分の乳房を眺めた。
痩せた胸に、申し訳程度の貧弱なふくらみがあった。みぞおちの汗を手で拭う。
“嫌な女の子……なに、これ……”自分の体のことをいつもこんなふうに評した。
身長は一メートル五十そこそこ、体重は三十八キロしかない。胸板は肋骨（あばらぼね）が透けて見えるようであった。
それでも、乳首に触れてみた。
くすぐったい感じはあったが、およそ、佐知子の考えていた性の感覚とはほど遠かった。
まだ、佐知子は男を知らない
今も下腹部に鈍い痛みがあった。
卵巣腫瘍で手術をした。雨の気配がある時は、決まって、傷跡に不快な痛みが生じて来る。
もはや、男を受け入れられない体なのかも知れない。それなら…いつだって佐知子は火の遊びをした

あとは気持ちが昂（たか）まった。
自慰の行為に耽ることなら許されているはずだった。今も、解放感に浸りたくなった。
脅迫状を寄越したに違いない債権者の男たちのことなど忘れていた。
乳首を押さえるようにして、しばらく、胸の動悸の音に聞き入る。男のような胸を眺めていた。
何か、わっと、叫びたい。ごわごわしたジーンズを性急な仕草で脱ぎ捨てた。
細い二本の脚が投げ出される。隣りの部屋から蛍光色の明かりが届いていた。その明かりの余映が佐知子の下半身を焙（あぶ）り出していた。膝小僧の貧弱さに加えて、内腿の肉の削げた感じが嫌だった。とてものこと若い女の体とは思えなかった。
正視するのが辛くて、左知子は、半分開いたままの襖を閉めた。暗い闇の中に自分の肉体を閉じ込めておきたいと願ったのだった。
敷き伸べられた蒲団の上で、そっと指を下半身にと忍ばせた。ショーツの下に指がもぐり込む。
熱い感覚を求めていた。
ちろちろと火の舌が体をくねらせ始めていた。
木造小屋に放った火は一瞬の白熱した光景を見せてくれたが、そのあとは白い木肌に火が這った。舐めつくす勢いで火は上方にと点じられて行ったのだった。左知子は火に焙られている自分の体のことを思った。
忍ばせた指はやさしく股間に埋まった。
あたたかく濡れて来る感じが好きだった。
内側から昂まって来て、指の感触に反応し始めていた。やさしく触れてやると、股間にあるものはわずかではあったがそれ自身で息をし始めていた。ガラス細工の壊れものを扱うように……であった。指を上下させているのではなかった。

指頭をそっと押し当てているだけのことで、わずかな震動が伝え られていたに過ぎなかった。

“ああ内部（なか）から溢れて来る……”

その嬉しい感覚を待ち望んだ。女の臓器がひくひくと息をし始めるそのひとときを願ったのであった。火の明りは左知子の瞼の裡で、もう燃え盛ろうとしているのに、なぜか、体奥にあるものはその時、火の勢いを失なっていた。

佐知子は子宮筋腫の手術をした身であった。

そのことが気になった。だが、左知子は禁じられているのに、また激しい感覚を求めた。

指をすべらせた。花唇を分けていた。

“こんなことをしてはいけない”

すでに、自制の気持が動いていた。それなのに指だけは、もっと強い感じを求めていた。

暖かなものを指が掬い取っていた。皮膜に塗りつけて行くと、その部分が熟い広がりを持った。

快さがもっと欲しくなり、縫合部の小さな突起に指が行った。ただ押圧の感じだけを愉しんだ。

これが男の指なら ……性への憧ればかりが募って行く。性の知識ばかりは頭の中に詰まっているのに、およそ左知子の考えている感覚とは違っていた。もどかしい思いに耐えられなくなってまた左知子は禁忌（タブー）を犯した。

小さな包皮部分に当てられていた指頭が、強い感覚をそこに作った。激しさが伝えられた。左右に指がぶれ、連続的な震動が加えられていた。

「あ……もう少しで、わたし……」

そんな思いがあり、指先に左知子の渇望の思いが込められた。が、また左知子は内部から撃たれていた。腹腔の内から、火矢が放たれていた。

手術で切り裂かれた傷の跡の奥所に、刺すような痛みが走った。

指を離した時、指先に傷跡の肉瘤が触れた。
左の脚の付け根に一匹の芋虫に似た縫合部の瘤起があった。縦に五センチ、この醜い形状の傷□は閉じられた生殖器に似ていた。
その時、遠くに消防車のサイレンの奏鳴音を聞いた。どれほどの時間が経過していたのか。
現実のこととは思っていなかったのに、急にあちらこちらから慌しいサイレンの音色が湧き起って来た。
一人だけの愉悦の時間は終っていた。
火を付けたことも、真夜中の街を走り抜けたこともどこか間遠い世界のことに思われていたのに、気が付いたら何台もの消防車が馳せ参じていたのだった。
左知子は汗臭いジーパンとTシャツを拾い、また身につけた。三畳の窓の向うに明りがついた。
どうやら隣家のものが起き出したらしい。
間もなく勝手口の向うから声が掛かった。
「左知子さーん、火事は近いらしいわよ」
寝たきりの病人がいることを考えてか隣家の女が少し甲高い声を張り上げた。
部屋の中でじっとしていると変に思われそうだった。仕様がないから左知子も勝手口から表に出た。南西の方角に火の手が上っていた。
この場所からだと直線コースを辿れば四百メートルとはない距離である。
家の軒並みが立て込んでいるので火事の現場とは遠い距離に思えたが消防車のサイレンの音ばかりはかなりけたたましいので、街中が火に包まれそうな緊張感があった。
「左知子さん。あれはまた放火ですかね」
いつの間にか隣家の中年男が左知子の背後に立っていた。でっぷりと太っ男で、白いシャツにス

テテコ姿のままだった。
「……」左知子は黙っていた。
「これじゃおちおち夜も寝てられやしない。一晩中、眼を醒ましたままの不寝番、その気にならないとね」
「わたし、寝付かれないほうだから、うちは大丈夫かしら？」
色ばかりは白い、男の妻が甘えた声を出した。男の手が場所柄もわきまえず、女の肉厚な尻に回っていたのであった。いかにもわざとらしい男の行為だった。子供がいないものだからこうやってこの夫婦者はよくじゃれ合っているのだった。
お先棒の一人が息せき切って駆けもどって来て火事現場の様子を伝えた。さわら垣の家に住む町内会の役員の男だった。
「ほら県立女子高の際、老人夫婦が住んでいた乞食小屋だよ。可哀想になにもかも燃えちまった。命は救かったもののあれじゃあね」
「あそこならよその家に燃え移ることはないもんね。やれやれだ」
隣家の男は勝手なことを口にした。
「消防署の連中は放火だって言ってるよ。いつわれわれだってやられるかも知れない。こりゃ自衛する方法を考えなくちゃねえ」
町内会の役員らしいことを口にする。
左知子はさっさとその場から踵を返した。
“あい変らず愛想のない女だね”そんなことばが聞えてきそうな気がした。
“おやすみなさい”のあいさつのことばも交わさなかった。
もう、消防車のいっときの騒ぎもおさまっていた。勝手口に向った時“あれ？”と思った。
隣家の便所の窓はきっちりと閉められていた。

さっき起き出した時に閉められたのだろうか。
それとも？左知子が火の遊びから帰ったあとに窓は閉められたのか？
嫌な思いだけが残った。
部屋にもどったら、六畳間から梯吉が声を掛けて来た。
「左知子、水を一杯くれ」
不機嫌な声の調子を含んでいた。
台所に立ちコップに半分ほど水を入れる。梯吉の枕元に黙っておいた。
「おい、のませてくれ」
体をうつ伏せにし肘で上体を支えていた。
梯吉の口にコップを持って行く。
一口のんでから、「なんだ。生ぬるいのか。氷ぐらいちゃんと入れたらどうだ」と、梯吉は不満をぶつけて来た。
それでもごくんごくんと音を立てて水は飲んだ。鶏の首のように皺が多い。咽喉仏の出っ張りだけが梯吉が男であることを示していた。
ついでにつけっ放しのテレビを消した。
もう親子の会話はなくなっていた。
左知子は眠りについたが、直ぐには眠れなかった。『いいかげんにしろ』この脅迫文の主のことを考えていた。隣家の男のことが頭にあった。
田尻義和という名であった。
年は三十六、七、元町のあめや横丁に飴製造の工場を持っていた。足腰が丈夫な時は、父の梯吉はよく酒を呑んだ。職人なので振舞い酒も多く、お調子者なのでよく深酒をした。
それだけならいいのだが、酒乱癖があり、隣り近所にも、ずいぶんと、悌吉は迷惑を掛けた。
いまもって田尻義和は梯吉のことはよくは思っていないはずであった。

脊髄を痛め、足腰が立たなくなった時、内心ではこの男はほっとしたはずだった。毎日のことで辟易（へきえき）していたのである。

聞き流したつもりなのに、

「一晩中眼を醒ましたままの不寝番、その気にならないとね」という、わざとらしい田尻のしゃべり口に、佐知子はまどわされてもいた。

もしかしたら……あの男は何度か真夜中の散歩に出る自分の姿を見たのかも知れない。

脅迫文を板戸に挟んでおくことだって簡単に出来るのだ。だとしたら何故、警察に密告しないのか？左知子は疲れていたが、頭の中ばかりは冴えていて、とうとう暁方まで寝入れずにいた。

3

東上線川越市駅前のショッピングセンターでまたいつかの老人に会った。一月前に、左知子は自転車置場の一郭で小さな衝突事故を起こした。

老人はその時の目撃者の一人であった。

三歳ぐらいの幼児を荷台に乗せた自転章と駐輪場を出たところで正面衝突した。両者がハンドルを左と右に向けたので避け切れなかった。

母親と幼児の乗った自転車は横倒しになり、幼児だけが土の道に落ちた。

やっと母親が倒れそうになった自転章をハンドルで支えたので幼児はゆっくりと荷台から土の道に転った。杖をついた老人が真直ぐ歩いて来て、いきなり、左知子を面罵（めんば）した。

「お前が悪い！よろよろと！まったく近頃の若いもんはマナーを知らん」

杖の先が左知子に向けられていた。いまにも打ちのめされそうであった。自転車を放り出したま

ま左知子は道の脇に坐り込んでいた。
朝から雨が降り続いている日で、左知子の体調は悪かった。自転車を漕いだら、下腹がしくしくと痛んだ。ぶつかる瞬間、下腹に力が入った。爪先で体重を支えた時、ずきんときた。
余りの痛さに自転車を投げ出した。
横倒しになった自転車を横眼にその場に蹲っていたら、眼の先に杖が突きつけられたのだった。投げ出された女の子が、一際高い声で泣いた。
左知子の非を責めだてするような執拗な泣き声だった。だが、左知子はそれどころではなかった。
片腹を押さえて「うーん」と呻いていた。
「おい、お前が悪い！なあ、それなのにすみませんとも言わん！おい！」
すっと伸びて来た杖が、左知子の肩先を小突いた。異常なところがあり、執拗な仕種だった。
「やめて下さい！」精一杯の声を張り上げた。
それで余計のこと老人の感情を害した。
「小さな事故でもな、のちのちどういうことにならんとも限らん。お母さん、駅前の交番まで行ってちもらやんと調書を取っておいて貰ったほうがええ。それに子供さんは病院へ連れて行って脳波の検査もしておかなくちゃな」
老人はもう左知子を加害者と決めてかかっていた。痛さに顔を歪めている左知子にはお構いなく、杖を持たない方の手で彼女の右腕を掴んだ。
「おい、駅前の交番へ来い！」
「そんなことされなくともちゃんと行きます。手を離して下さい」
やっと立上り、無遠慮な老人の腕を振り払った。まだ子供は泣き止まない。衝突した時の状態を言えば子供の状態は大したことではないはずだった。大柄な女は腕の力で自転車を支えた。

子供は地上に投げ出された時どしんと落ちたのではなかった。ゆっくりと自転車の荷台から転げて落ちただけだった。

まるで監視人のようにこの目撃者の老人は左知子を後から追い立てた。距離をおかずについて来て、駅前交番では先ず自分から口をきいた。

左知子は警察で名前を訊かれ、住所と電話番号も書類に記載された。

「ああ、お前んところは三光町か、わしんところは月吉町の団地、隣りのようなものだ」

老人だけが頷いた。

老人がまくし立てたお陰で、警察でも加害者と被害者の立場がはっきりした。

女は六軒町のアパート住いの身であった。

二日後に女から電話があった。

女の子が左手小指を痛がるのでレントゲン撮影して貰ったら小さなひびが入っているのが判ったと言った。

「見舞金はいらないから医者に要する費用だけは払って欲しい」と何度も念を押された。

一週間ほど経って請求書が送られて来た。

同封された便箋には『三日以内に支払って下さい。私の方は川越に来てまだ半月、国民健康保険の手続も済んでいないので、実費で立替えていますから』と記されていた。

請求金額は二万一千円と少しあった。

生活保護を受けている身にはこの金額は大きな負担だった。指定された銀行口座に振込まずにいたら、乱暴な男の口調で電話が掛かって来た。

「払わないんだったら、見舞金を三十万円は用意して貰うよ。なっ、あの子は今でも痛い痛いって泣いてんだから。おれさ、明日にでもそちらへ集金に行くから。警察に言ったら両者で話合って示

談にしろってさ」
その翌日、左知子は嫌な思いで一日を過ごした。来て貰っても金は払えないので、左知子の方から断わりの電話を入れた。
何度掛けても電話口には誰れも出なかった。
翌日の新聞の片隅に女の亭主らしい男の名が出た。詐欺事件を起しこの地に逃げて来て捕まったのだった。立寄ったところを逮捕したと書かれていたから、男は別の場所に身を隠していたのかも知れなかった。
その三日後に今度はあの目撃者の老人から電話が掛かって来た。まだ真昼間のことであった。
「悪いのはあんただよ。早く被害者に金を払ってやりなさい。そうだ。あんたじゃだめだからお父さんかお母さんを出しなさい」
「そういう人は居ませんから、うちは」
「なに言ってる。わしはお前のような若者が一番嫌いなんだ。ええ、どういう教育受けてるんだ。親の顔が見たいよ。今、すぐ近くの公衆電話ボックスから電話を掛けているんだ。いいか、そういうことなら今からそちらへ行ってやる」
「あの……」電話はがちゃりと切れた。
家に怒鳴り込まれたら面倒だった。
左知子は老人がやって来る前に家を出た。近くの公衆電話ボックスまで迎えに行く気だった。
わざわざ近くの公衆電話ボックスから電話を掛けて来たとしたらすでにこの家の所在は突き止めているはずだった。
小走りに辻を曲がり、公衆電話ボックスのある場所に出たら、杖を持った老人がこちらに向って来るところだった。
道路の真中で立止まり、杖をじっと握り締めて老人は身構えていた。

なにやらあたり構わず声を張り上げている。
「こいつだ、こいつだ…」
近付いたら杖の先が左知子を指さしていた。
老人は一人で怒りを表わしていた。
杖の先がぶるぶると震えている。
人が何人か通り過ぎたが、みんなちらと視線を投げただけで無関心を装った。路上で殺人事件が起っても知らぬふうであった。
走り寄った左知子が老人に口を利いた。
「あと一週間だけ待って下さい。お金は何とかしますから」
金を工面するあてはなかったが、その場をおさめるには嘘をつくしかなかった。
「わしは松山俊江の後見人よ、ええか、色々と相談に乗っている。忘れるな」
請求書を寄越した女の名を口にした。
「いいかげんなことしておると川越に住めないようにしてやるからな。電話だって毎日掛けてやる。これも世の中をよくするための社会奉仕じゃよ。若い女が威張りくさる世の中なんて、わしは許せんのじゃ」
散々毒付かれ、憎悪の眼差しで全身をなめまわされた。人が立止まって、諍（いさか）いの最中の、二人をしばらく眺めていたので、やっと、解放された。みんな、異様な老人の振る舞いに眉を顰（しか）めているふうだった。
「ええか、お前は加害者なんじゃ。警察にしょっ引かれても文句はいえんのだ」
少しは回りを気にしてか、体面をつくろい、老人は捨台詞を残してその場から去った。
その日から七日が経っていた。
その約束の日は昨日だった。
ショッピングセンターの駐輪場の日陰の場所で老

人は相変らず杖を片手に一点を凝視していた。
「嫌な人に会った」そう思って一度駐輪場に入れた自転車をUターンさせた。
ちらと振り向く。
真直ぐ視線は左知子の背に刺さっていたが老人は気付いていないのか、視線をまだ宙に泳がせていた。駅前のショッピングセンターで買物をするのは止めた。自転車を漕いで、西武線本川越近くの新富町商店街にまで足を伸ばした。
『いいかげんにしろ』後から追われているような強迫観念を持った。
もしかしたらあの脅迫文はあの老人が用意したものかも知れなかった。
この老人がどんな生活をしているかは、佐知子は知らなかったが、期限が昨日の夜十二時としたら、その時間がきっちり終った時刻に一枚の脅迫状を配達することは充分に考えられた。
偏執狂の男ならやりかねない。
老人の尖った顎と、杖を持った痩せた手、人を射るような冷えた眼差しなどのことが思われた。
そのように考えたら、初めから左知子はあの老人に付け狙われていたようでもあった。
さっきは、ちゃんと左知子の姿を捉えていながら、敢て無視したのかも知れなかった。
一人で楽しむ術を老人は知っていたのかもしれない。何事にも用意周到で、松山俊江ともちゃんと会って、その後の左知子の誠意のほどを訊き出し、おのれの楽しみのために、一役買って出たに違いなかった。その後、女からは一言もない。
老人にすべてを任せたということなのか？
その夜、きっかり、午前零時にその後見人と称する老人から電話が掛かってきた。
「もう期限は切れているよ。お前は一体どういう

女なんだ。えっ」
「いいかげんにしろとでも言いたいんですか」
「いいかげんにしろだと？おい、お前、今度は開き直っているのか」
老人の声は怒気を含んでいた。
左知子は試してみたのだった。
脅迫文の文句を並べてみたのだ。
ことばの調子では老人はこの文句には覚えがないふうであった。
「そういうことならこちらにも考えがある！」
いきなり電話を切るのが好きな老人だった。
また耳元で乱暴な音がした。
左知子は肩でふーと大きく息をつく。
ぱたっぱたっととたん屋根の平らな面にその時雨が打ちかかって来た。一気に降り注ぎ、過ぎ去る雨を望んだのに、じめついた雨になっていた。
もう昨夜から雨の気配は聞き取っているのだ。なにより、左知子の病んだ体は遠くの雨にすでに、不快な思いをさせられていたのだ。
傷の奥が雨の気配を嗅ぎ取ると、しくしくと痛み出す。〝ああ嫌だ、嫌だ、また雨が降って来た……〟。左知子は雨の音に身を震わせた。
いま、川越の街は西の端から濡れそぼれて、てかてかと光り始めているのだろう。
暗い街の雨の情景のことが思われた。
昨夜からの〝脅迫者の眼〟のことがあって左知子は疲れが増していた。気持だって焦立ったままである。だが今夜は火の遊びは許されてはいなかった。左知子が火を点ずる前に、人々を安心させるために雨が降り始めた。
ぱたぱたっと鳴った予告の雨音は、今は連続的な爆雨のリズムに変っていた。それは左知子には痛い音だった。傷口に突き立って来る鋭い針先の

ことが思われた。
とても辛い時間だった。

4

左知子の生活のリズムが狂い出したのは二年前からである。
父親の転落事故が一家に不幸をもたらした。
筑波学園都市にある大学で、中学教師になるための勉学に励んでいたのに、三年生で中途退学した。左知子は父の看病をするために川越に戻ったのだった。
左知子が卵巣腫瘍と診断され手術を受けたのは去年の秋も終りの頃であった。
その時はまだ母の芳枝は家に居て、夜はスナック勤めをしていた。蒼い顔をし、時折り痛みを訴える娘に、芳枝が産婦人科に行くようにすすめた。その日もやはり雨が降っていた。
秋の終りの雨だから冷たくて、左知子の気持まで暗くした。医者を訪ねる前に散々、家庭医学書に眼を通した。
症状をたどると、腫瘍が女性臓器の内部に生じているようだった。
子宮か卵巣、それに卵管部にも筋腫や肉腫、がんなどが巣喰うことがわかった。
「お前の体じゃ、子供は生めないよ。もしかしたら女の体じゃないのかも知れないね。この際、ホルモン注射でも何でも、しっかりお医者さんに見て貰うことだね」
そんな話をした芳江は、その頃は、不動産会社の社長の男とは別れて、三つ年下の男と年甲斐もない関係にあった。
「ちゃんとお医者さんには行くから余計なこと言

わなくともいいの」
左知子は細い眼で上眼遣いに母の顔を見た。三白眼になり、怒りが露わになった。
二階に通ずる階段の下での二人の会話だった。
そのまま芳枝は急な階段に足を掛けた。
よく発達した大きな尻をしていた。
ぴたっと尻の割れ目に喰い込む伸縮自在のスラックスをはいていたので、余計のこと、中年女の腰の線が強調されていた。
どんどんどんと足音も荒々しい。
重い体重のせいで踏板がぎしぎしと鳴った。
とてものこと左知子には芳枝が自分の母とは思えなかった。
大学へ進む時も母にはずいぶんと反対された。
知り合いの美容院にぜひ娘さんを寄越してくれと頼まれていたものだから義理が立たないと言い張った。客商売に左知子が向くと母が考えたのは、高校生の時は活発な女の子で、小柄の利点を生かして器械体操部ではキャプテンをつとめていたからだった。それに年頃の女の子らしく結構おしゃべりで友達も多かった。
受験勉強と、生理不順の症状などから来る下腹の不快感が重なり、結局、ハードなトレーニングを要求される器械体操を止めた。
ほんとうは大学に入った時、器械体操を始めるつもりだったが体調が優れないために左知子は体操の選手になることをあきらめた。
川越の市街部にある産婦人科医院を訪ねた時、左知子は自分と同じ年頃の若い女が子供を堕ろす相談に来ているのに出会った。
待合室で少女マンガ本に眼を通していた女子大生風の髪の短い女だった。
白いカーテンで仕切られていたが、女の顔は思い

浮かんだ。
同棲している男子学生がいるのだが、二カ月前からアメリカ旅行に出ていて連絡がとれないという。
女医が男子学生の同意を得てからにしなさいと忠告したら途端に女はしくしくと泣き出した。
“私と一緒に住むのが嫌でアメリカ旅行を口実に男は部屋を出て行った”のだと本当のことを言った。
左知子は筑波学園都市に住んだ時、同じような話に何度も出会った。“いい気味だ”と思った。
火遊びした罰が当っただけのことだった。夏が過ぎても戻って来ない男たちはいくらでもいる。
それから三十分後に、左知子は女医者から手術が必要であると宣告された。
「卵巣腫瘍もかなり悪質のものですよ。一種の性ホルモン分泌異常が引き金になっているんだけど、今のうちにちゃんと処置しておかなくちゃだめ。卵巣摘出手術が必要だけど、片一方だけのことだから何とか子供は生める可能性はあるわね。もっと精密検査してみなくちゃわからないけど、未分化胚細胞腫ってことも考えられるわね。女性の体としての機能の発育が阻害されることがあるの。無力性体質の疑いもあるようね」
暗に、女医は貧相な左知子の体の発達具合いのことを言ったのだった。
手術費用を捻出するのに、母の芳枝が苦労した。スナック経営は思わしくなかったわけだから、三十万円余の金を工面するのは母にとっては大事であったのだ。
十日後に、左知子は執刀を受けた。手術室の白い壁と、消毒臭、名も知らないステンレス光を持った測定器械や、手術具などに取り囲まれた。五本の指を内側に閉じ「一つ二つ……」と数字を読んだ。
麻酔がいつ効いたのか、数字の読み方が、けだる

いものとなり、左知子はふーと無意識の世界に落された。手術を受ける前もそれほどの感慨はなかった。嫌な下腹部の不快感さえなくなればと思った。

一つだけ、常人とは別のことを考えていた。

女としての機能を喪なうかも知れないとは余り思わなかった。自分でも恐い物思いだと気付いたことだが、ステンレス光のメスを見た時、そのメスが処女膜の襞を分けるのしらと思った。

左知子にはずっとその神聖な持物が重荷になっていたのだった。

二十二歳にもなって……多分にそれは、同年代の他の女達への妬心もあってのことだった。

何も知覚していない手術の時間だけが、左知子にとっていちばん幸せな時の合間となった。

十二日間の入院生活を了えて家に帰ったあたりから、また下腹部の不快感が兆した。

予後の経過は余りよくなかった。

それでも、時折りは痛みを忘れることもあった。

空気が澄んでいて、暖かな日などは、もうどこまでも自分の思いのままに遠くまで歩いて行けそうに思えた。

だが、雨の気配があると、左知子は途端に憂欝さを体の内に抱え込んだ。

しくしくと手術跡が痛み始めるのだった。

特に、しとど降る秋の雨には泣かされた。丁度季節も悪かった。寒さに向う頃だから、痩せた腰に冷えが伝わった。病院通いをする身になったが、急には左知子の症状はよくはならなかった。

ホルモン剤なのか、週に一度、飛び上るほど痛い注射の針を腕に突き立てられた。

医者には余り聞きたくないので、本屋の医学書コーナーに行って未分化胚細胞腫なるものの症状を拾い読みした。

要するに、男っぽくなる症状で、男化胚細胞腫は男のように声変りしたり、ひげが生えたりすることもあるという。小さな乳房と痩せた腰、そのくせ、左知子の陰毛地帯は猛々しい。

直毛質の、男のような叢林（そうりん）に手が触れる時、左知子はいつも嫌な思いをしてきた。

きっと男性ホルモンが過剰で性への欲望ばかりが強いのだとも考えてきた。

思い当る節があるので、医学書の説明文をむさぼるようにして読んだ。

病院側は一向に左知子の症状がよくならないので暗に再手術をすすめた。

もう左知子自身、手術台に上る気持はなかった。

他の医者に診て貰うことも考えたが、その前に母の芳枝が、年下の男と連れ立って川越の街から姿を消した。いずれにしろ、金の工面がつかない以上、再手術は無理だった。

左知子は相変らず、自分の体の内部に病巣部を抱えたまま日々を過ごすことになった。

火を放つ行為だけが今の左知子にとっては自分の気持を解き放つ唯一のあそびであった。

妙な思いがあった。

あの、腋窩（えきか）に沿って印されている芋虫状の肉瘤部を見ると、自分の下腹部のどこかに嫌らしい貌（かお）をした無数の虫が巣喰っていそうな気がした。

その醜い虫共を火で焙ってやれば、みんな熱さに妙（い）られて体の外に遺い出してくるのではないかと思った。

いや、じめじめした感じが嫌なのだった。

ぬらぬらした体液を持った虫の巣を抱えている感じは我慢がならなかった。

まして雨が降れば……。

あの梅雨時の、べとついた気味悪さを左知子は四六時中、吾が身に抱いていなければならなかったのだ。鬱症状の気分も味わった。

そのままじっとしていたら病巣部から体が腐って行くと思った。はっきりそう考えていたわけではなかったが、左知子は雨の降る日はいつだって嫌な自分の体臭を嗅いでいたのだったー。

（第一章　了）